シンポジウム

③　受難と母性

日蓮宗　壽命山昌福寺住職　　**岩 間　湛 教**

人がその能力を最大限に発揮しえるのは、「もし私がこの子を守らなければ誰もこの子を守ってくれる人はいないのだ」と、覚悟を決めて命がけになっているときではないでしょうか。

無敵でも不死身でもない私たちが、我が身を犠牲にして、ときに傷つき、血を流すことさえいとわない。

持てるものすべてを躊躇なく与え、喜ぶ顔を見るために苦労など惜しまない。

つまり私たちは、何かに守られて安全でいるより、何かを守ろうと捨て身の覚悟をした時の方が〈強くなれる〉。

自分の身を案ずるよりも、大切なものの将来に心を砕いているうちに、いつのまにか限界をこえて〈大きくなっている〉。

むしろ私たちは、自分のためにはじつはそれほど頑張れない。すぐに自分に言い訳をして、楽な方に流されていってしまう。

だからこそ、「守るべきもの」との出会いは、それが我が子であれ、仲間であれ、仕事や地域、風景や自然環境、思想や理念であれ、このうえなく幸福なことであり、私たちの〈強さ〉をうみだす根源、〈成長〉の原動力ということができます。

しかも母性は、何処かで誰かに学んで得たものではなく、性別にも関係なく、私たちの誰のなかにも自然に湧き上がってくる。

そしてそれは人間だけに限られず、他の動物たち、そればかりか植物にも、山にも、川にも、石や塵にも、国土にさえも秘められている仏の性質、つまり「仏性」なのだというのが、東アジアの、とくに『妙法蓮華経』に依拠した人たちの世界観、身体観であると思っています。

私は学術者ではありませんが、『妙法蓮華経』に依拠する日蓮宗の僧侶として、このような考えで実際に寺を営み、構築しようとしている者です。

この度は貴重な学びの機会を与えていただき、大変ありがたく思っています。当日お会いできることを心から楽しみにしています。合掌。

南無妙法蓮華経